至福スケッチ

詠琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
至福スケッチ

【Ｎコード】
Ｎ２２７７Ｑ

【作者名】
詠琉

【あらすじ】
百万人に一人いるかいないかの特殊な手を持ってうまれた人々は、ある特殊なスケッチ法を使うことを許された。
特殊な紙、特殊なペン、特殊なインク、特殊な技法、そして特殊な手が揃った場合のみ、完成したスケッチとスケッチ対象に生じる「繋がり」。そのスケッチを、人は至福スケッチと呼んでいた。
そして、その至福スケッチの使い手として生きていた老人は、“閉ざされていた少女”や“手を失った至福スケッチの使い手”と出会い、至福スケッチの真意を知る為の旅を始める??。

序章?景、枯、花（前書き）

・この作品は私自身が某掲示板サイトで執筆中の作品「至福スケッチ」をこちらに転載したものです。決して盗作ではありません。ご了承下さい。

序章？景、枯、花

「……綺麗だ」

老人は色褪せた羊皮紙に線を引いていた。否、スケッチをしていた。

確かに綺麗な情景であった。空は文字通りの“雲一つない青空”で、高くなるほど色合いは深みを増していった。無論その情景の見所は空のみではない。老人のいる丘などは精彩な芝生が余すことなく生えきっており、所々に咲いている花はそれぞれ特徴的な花弁の形と鮮やかな彩りを兼ね備えている。そして、丘の中心に根差している大木は、夏が来た時に人々の涼みの場となるであろう大きな影を堂々を映し出していた。

しかし、老人がスケッチをしていたものは、“雲一つない青空”でも、草の生えきった丘でも、華麗な香りを纏った花でも、葉を散々茂らせた大木でもなかった。

老人は丘に存在する様々な魅力には目もくれず、生き生きとしているわけでもない、美しいわけでもない、ましてやその道に長けている人物なら分かる何かがあるわけでもない？？ただただ無惨なだけの、枯れかけている一輪の花をスケッチしていたのである。

やがて老人はペンを置くと、どこか満足げに頷いた。

そして、傍らに置いてあったペンやインクやパンをまとめると、羊皮紙を丘に投げ出して去っていった。

それから幾分かの時間が立ち、老人がスケッチしていた花が完全に枯れて土に返っていった頃？？羊皮紙は、線どころか染みの一つもない、ただの色褪せた羊皮紙に戻っていたという。

至福？遮、木、燃

既に太陽は昇っていた。宇宙で光を放つそれは闇を打ち消し、世界に光を齎している。しかし、世界の左端に存在している小さな森は、依然として陰気な闇に覆われていた。

無論、太陽の光はその森にも届いていた。が、生い茂る木々が折角の光を遮っていて、森の中はかろうじて木の輪郭が見える程度だったのである。

そんな森の中で、一人の老人がキャンプをしていた。湿り気のある切り株に腰掛け、焚き火をしようとしているのかマッチ片手に枯れ木を組んでいる。

老人の顔は深い皺が刻まれており、猫背である点を差し引いても背が人より低かった。体は肉がどこについているのかも分からないくらいにやせ細り??または肉などついていないのかもしれない??、長年着こなしてきたと見えるローブを身に纏っていた。　ひ弱な彼が何を原動力にこのような森でキャンプなどしているのかは、全くの謎である。

やがて老人は木をバランスよく組み終えると、片手のマッチをこすって木を燃やそうとした。が、マッチは湿っていたため火力はとても弱く、枯れ木とは言えども焚き火を起こすことなど出来そうになかった。

老人は小さく溜息を吐くと、どこからともなく一枚の色褪せた羊皮紙を取り出した。さらに先端が黒ずんでいるペンと色のないインクを取り出すと、それらを使って羊皮紙に線を重ねていく。　男は絵を描く事にとても慣れているのか、それが己の組んだ木そっくりの輪郭をなすのに三十秒もかからなかった。

そして、再びマッチをこすり、枯れ木の方??ではなく、先ほどの羊皮紙に火をつけた。

最初は微弱なものでしかなかったそれはじわじわと紙面を伝い、

羊皮紙を喰っていくように燃やしていく。
羊皮紙は、燃えた。
枯れ木も、燃えた。

至福？繋、手、明

先ほど老人が作り出した不可思議な現象、人はこれを至福スケッチと呼んでいた。

流れ自体はごく普通のスケッチと同じもので、目の前の風景や物体を大まかに写し取る行為なのだが、この至福スケッチ、普通のスケッチとは全く違うものだといっても過言ではない。

特殊な紙、特殊なペン、特殊なインク、特殊な技法、そして特殊な手。それらが全て揃って初めて完成する至福スケッチは、スケッチしたものと完成したスケッチに「繋がり」を持たせるのである。

例えば、花や草をスケッチすればその羊皮紙からは花や草の匂いが伝わってくるし、その羊皮紙を燃やしてしまえば、スケッチされたものも簡単に燃えてしまう。

ただ、至福スケッチは誰もが使いこなせるものではない。

前述したように、至福スケッチは特殊な紙、特殊なペン、特殊なインク、特殊な技法、そして特殊な手が揃わなければ完成しない。紙やペン、インクは購入すればいいだけの話であるし、技法は修行を積み重ねれば習得できるものなのだが、「手」というのは常人には持つことが出来ない。

至福スケッチには適した手というものがあり、それは誕生した時から持っていなければならない、所謂“資質”なのである。

しかもその手を持って誕生したものは、百万人に一人いるかいないかの大変貴重なものなのである。

そしてこの老人、百万人に一人いるかいないかの手を持つ、百万人に一人いるかいないかの至福スケッチの使い手なのであった。

先ほどの焚き火を使って朝食をすませ体を温めた老人はテントを手際よくたたみ荷物をまとめると、それら全てを背中にしょいこんで歩き始めた（前にも述べたが、年老いた彼のどこに荷物を背負っ

て歩けるような力があるのは全くの謎である）。
暗幕で覆われているのかのような暗く陰気な森は、ゆっくりと、しかし確実に明るくなっていく。しばらく歩いていくとぬかるんでいた地面もしっかりしたものになっており、老人にまとわりついていたじめじめとした空気も何処かへと消え去っていた。
そして、数十分ほどの時間が経ち??急に老人の視界が光に彩られ、視界に一面の麦畑が顔を出した。

至福？麦、囁、絵

老人は微かに顔を綻ばせ、目の前に悠然と広がっているそれを見渡した。

まだ穂の成熟していない若緑の稲穂が小さな風に揺らされ、一斉に同じ方向へと揺れる。稲穂同士がこすれ合って、囁いているような音を出す。

老人はうっとりとそれを見つめていたが、やがて空の方に視線をよこして目をしょぼつかせた。空はまさに雲一つない青空で、太陽が空に全てを曝け出し、眩い光を四方八方に飛ばしていたのである。

「スケッチには最適、か」

老人は目頭を指で押さながらそう呟いた。一面の麦畑と青く深い空。この情景をスケッチに最適と呼ばずして、なんと呼べばいいのであろうか。

老人は羊皮紙とペン、インクを取り出し（何処から取り出したのかは説明がいささか困難である為割愛する）、スケッチをする体勢に入った。

舗装されていない道の脇にしゃがみ、インクをつけたペン先を羊皮紙にふれさせた、その時である。

「私の絵を描け」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2277q/

至福スケッチ

2011年1月22日12時55分発行